『ウェゲナーの大陸移動説は仮説実験の勝利』感想

・先ほど届き、すぐに読んでみました。
とても素晴らしい本でした。もっと早く、買っておくと良かったと
思いました。

(1)とても良く調べて、それがきちんと整理されていています。自分で少し、調べたのでそのことが良くわかります。

(2)科学論もその通りだと思います。〈現象を説明できない(していない)理論は、疑って良い〉ということだと思います。

ぼくは、学生時代「地向斜」が理解できませんでした。

大学生の時にアーサーホームズの『一般地質学』が話題になっていましたが、ぼくは、その革新性に気づいていませんでした。アーサーホームズが「マントル対流説」を提案したのが、1928 年とは思っていませんでした。1960 年ころの話と思っていました。

丸山さんの著作も後半で、引用されていますね。ウェゲナーの「ニュートンが現れていないことに心配はおよばない」(95 ぺ)と、彼が理論家の出現を予言していた「ニュートン」が、丸山さんたちが、なのかもしれないと思っています。

（仮説実験授業研究会会員）

・読みやすい本である。文献調査が隅々まで行き届いているという印象を受けた。本書にも取り上げてある板倉聖宣著『模倣の時代』（上・下）（仮説社・1988 年）とその役割が相似している。

本書は大陸移動説関連の研究において，脚気の解決における板倉聖宣著『模倣の時代』と同様の役割を果たしていると言える。その意義は大きい。さらに，本書は板倉科学史学の成果である「仮説実験的認識論」を歴史的に位置づける使命も担っている。　（仮説実験授業研究会会員）

・　ウェゲナーの大陸移動説はともすると無味乾燥になりやすい博物的な地質学から地球科学へと私たちの目を向けさせてくれた記念碑的書物だったとしその後、著者自身も独自の仮説実験授業を推進した経緯をおもちだ。

早すぎるひとつの学説が時代の中で不動の位置を築くまでの経緯が丁寧に纏められている。ウェゲナーが地質学者でなく、気象専門の地球物理学者だったことも幸いしたのだろうか。ウェゲナーの研究法には科学の目があったと讃える。実に多くの〈検証した事象〉を丁寧に積み重ねていったのだ！そして、調査に行ったグリ

ーンランドでの訃報、大陸移動説の殉教者のようにも思える。しかし悲劇的というより、職人魂をみるようで心が暖かくなるのは不思議だ。(Naturarist1)

・それまで誰も言っていなかったことを言うのは楽じゃない。研究にオリジナリティは不可欠だけど、誰かがやったことを少し発展させてみて、たくさんの確からしい説のなかで、わずかばかりの未知のすきまを埋めるのがふつうだ。ウェゲナーは専門外の立場から、大陸移動説を唱え始めた。それを支えた自信はどこからきたのだろう、という疑問の答えが、この本にある。

　ウェゲナーがいきなり唱えたように見える大陸移動説だが、それにつながる、科学的に検証された証拠はすでに用意されていた。それらのいろんな分野にまたがる説を使ってていねいに仮説を検討したことが、大陸移動説を支えた。新説といっても、それはふつうに科学の方法を積み上げた地道な成果だったのであって、少しも突飛なことではなかったのだなと納得した。(Naturarist2)